

アシステック通信

ASSIS TECH

特集 ユニバーサルひょうご
フォーラム2006



2006

目 次

特集 「ユニバーサルひょうごフォーラム 2006」

- (1) ユニバーサルひょうごフォーラム 2006 の概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- (2) 「みんなでつくろうユニバーサル社会」の作成 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 福祉のまちづくり工学研究所との協同『すごろく』作り ・・・・・・・・・・・・ 4
神戸市立王塚台中学校 森田 剛志
- (3) 第6回公開講座「車いすを科学する」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- (4) 第14回福祉のまちづくりセミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
記念講演「観光とユニバーサルデザイン～魅力あるまちづくり～」
JTM バリアフリー研究所長 草薙 威一郎

研究所だより

- ・日本福祉のまちづくり学会 第9回全国大会参加報告 ・・・・・・・・・・・・ 11
- ・第21回リハ工学カンファレンス参加報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- ・国際フロンティア産業メッセ 2006、兵庫自治学会出展報告・・・・・・・・ 13

アシステック掲示板

- ・ひょうごアシステック研究会第5回勉強会見学会及び新春情報交換会のお知らせ

《綴じ込み付録》 みんなでつくろうユニバーサル社会～1日体験すごろく～

What's ASSISTECH?? 「アシステック」とは??

障害者や高齢者等を幅広く支援する技術という意味でアシスティブ・テクノロジーからつくった言葉です。

福祉のまちづくり工学研究所は、福祉のまちづくりを実現する技術的中核施設として、総合リハビリテーションセンター内に設置されています。“開かれた研究所”をめざしておりますので、ご意見や研究の参画希望などがありましたら、お気軽にお寄せください。

「ユニバーサルひょうごフォーラム 2006」の概要

兵庫県では「ユニバーサル社会」の実現を目指し、ユニバーサル社会づくりの理念と実践を総合的・重点的に発信する「ユニバーサルひょうごフォーラム 2006」を8月6日から9月10日まで開催しました。

このフォーラムでは、親子をはじめ県民だれもが参加できる体験イベントや展示会、推進大会及び福祉のまちづくりセミナーなど、県、総合リハビリテーションセンターなどが主体となりユニバーサル社会づくりの関連イベントを実施し、多くの皆様に参加していただきました。



記念シンポジウムの様子

8月6日の開幕式では、赤穂精華園利用者による「赤穂権現やんちゃ太鼓」を皮切りに、澤村誠志総合リハビリテーションセンター顧問をはじめ、パラリンピック車いすマラソン金メダリストの畑中和さん、タレントの亀山房代さんを迎え「みんなでつくるユニバーサル社会～だれもが暮らしやすい社会、だれもが参加できる社会をめざして～」をテーマ

に記念シンポジウムが開催されました。



聞き入る参加者

その他の開催イベントは、夏休み期間でもあり親子で参加できる催しも多く、各会場で大いに盛り上がりを見せていました。

当研究所は第6回公開講座「車いすを科学する」と題して、実際に車いすに乗って、勾配、段差等の体験をし、車いすを科学的に分析するイベントを開催しました。参加者は2歳のお子さまから中学生、一般の方まで幅広く、多数の参加をいただきました。

また、9月10日には明石市立市民会館を会場に「ひょうごユニバーサル社会づくり推進大会・第14回福祉のまちづくりセミナー」を開催しました。

第1部として推進大会を開催し、兵庫県内において、ユニバーサル社会づくりをめざした先導的な実践活動を顕彰するため、今年度創設された「ひょうごユニバーサル社会づくり賞」の贈呈式が行われました。計12の個人、団体、企業に知事賞等、各賞が贈られ、事例紹介がありました。

た。

引き続き第2部のセミナーでは、JTM バリアフリー研究所長の草薙威一郎氏を招き「観光とユニバーサルデザイン～魅力あるまちづくり～」をテーマに記念講演会を行い、約400名のみなさまのご参加をいただきました。

★主な開催イベント★

開催日	行事名
H18. 8/ 6	開幕式 記念シンポジウム
	福祉車両・車いす特別展示会
	第6回公開講座「車いすを科学する」
	おもちゃ図書館
	クイズオリエンテーリング
	親子でスポーツ体験デー
	ほほえみバザー
H18. 8/13	キッズスポーツ教室
H18. 8/19	UD施設体験ツアー
H18. 8/20	ユニバーサルデザインの生活支援用具の展示会
	自助具のワークショップ
	ほほえみバザー
	ユニバーサル車いすバスケットボール大会
	地域交流“たそがれコンサート”
H18. 8/25	ふれあいスポーツ交流館杯争奪卓球大会
H18. 8/27	ひょうごジョブコーチネットワーク活動発表大会
H18. 9/ 2	第30回日本障害者体育・スポーツ研究会
	障害者カヌー教室
H18. 9/ 3	西区障害者安心ネットワーク就労支援シンポジウム
H18. 9/10	ひょうごユニバーサル社会づくり推進大会・第14回福祉のまちづくりセミナー

「みんなで作ろうユニバーサル社会」の作成

「ユニバーサルひょうごフォーラム 2006」の一環として、当研究所と、家庭介護・リハビリ研修センターを中心に、ユニバーサル社会のリーフレットを作成しました。

小・中学生を対象にユニバーサル社会をわかりやすく説明した、総合学習などでも活用できる冊子作りをめざし、ユニバーサル社会をわかりやすく表現した解説と、遊びながら楽しく学べるよう「ユニバーサル社会1日体験すごろく」を掲載しました。（本号に縮刷版を綴じ込み）



すごろく作成の様子

研究所は主にすごろく面を担当し、日頃からセンターとの交流がある近隣の神戸市立王塚台中学校の生徒と教員などに協力を依頼し作業を進めました。センターでの全体会議で、すごろく作成に関する概要を理解してもらい、「中学生の目から見たユニバーサル社会」をすごろくの中に表現してもらいました。

校正では、全体のイメージやイラ

ストなど、生徒の意見をできるだけ取り入れて、近隣の小・中学校教員のアドバイスも受け、完成しました。

現在、小・中学校の総合学習では「ユニバーサル社会」がテーマとして取り上げられることが多く、このすごろくでは、身近な生活環境において、高齢者や障害者などが困っていることや対応の仕方などについて、みんなで楽しく学べるように、イラストを多く用いわかりやすく説明しています。また、ピクトグラムや点字ブロック、誰もが使いやすいように配慮された商品の一部を写真と説明で紹介。クイズ形式で、すごろくで遊んでいる子どもたちに問いかけるコマも作りました。

作成に関わった生徒の一人は「ピクトグラムは、普段よく見かけるけど、その意味を知らない人も多いと思う。すごろくで遊びながら覚えて欲しい」と答えており、このすごろくがユニバーサル社会を考えるきっかけになることを願っています。



でき上がったすごろくで遊ぶ

福祉のまちづくり工学研究所との協同『すごろく』作り

神戸市立王塚台中学校 教諭 森田 剛志

兵庫県立総合リハビリテーションセンター（以下、センター）の西に位置する本校は今年で創立 30 周年を迎える中規模校です。センターから徒歩 5 分という立地条件もあり、センターとは様々な形で交流を続けています。車いす一台分を目標に毎年 11 月に校内や街頭で募金活動を行う「一円玉キャンペーン」は 20 年以上続いているほか、福祉体験学習の一環として、車いす介護の体験学習の受講や福祉展示ホールの見学、また、特別養護老人ホーム「万寿の家」を訪問したりもしています。

今回、兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所の方々と協同でユニバーサル社会に関するリーフレットの製作に携わることになったのも、そういった普段からの交流がきっかけとなりました。

今年、2 年生（29 回生）は 1 学期にセンターで福祉体験学習を受講しました。その際に、この 8 月に行われたユニバーサルひょうごフォーラムの概要を知り、同時に配布するリーフレット製作への協力の依頼を受けました。小中学生がユニバーサル社会について理解できるようにすごろくを作ることが決定しており、本校としてはアイデアやイラストの部分で協力することとなりました。そこで、2 年生では学級委員長 2 名（男

子）と美術部 3 名（女子）の計 5 名のチームを編成し、活動にあたりました。

第 1 回目、センター内の静かな会議室で開かれた編成会議に参加した際は、大人たちに囲まれ普段はあまり経験しない様子の中、生徒たちはさすがに緊張しておりました。中学生の目線から見た、「子どもたちが楽しめて、なおかつ学べるもののアイデア」という宿題をいただいたものの、正直なところ私も含めて、「これは結構大変なことになってきたぞ。ユニバーサル社会についてもっと勉強しないとイケない。」と思ったのが共通する感想でした。



センターでの編集会議の様子

第 2 回目は、場所を本校に移し、福祉のまちづくり工学研究所から西尾さんと室崎さんに来ていただき、下書き作りに取り組みました。学校での作業とあって、前回とは違って生徒たちもあれやこれやと意見を出

しながら盛り上がっていきます。そして決まったのが、すごろく全体を自宅や学校、街中などのエリアに分け、それぞれにユニバーサル社会の項目の入ったコマを入れていくという形でした。おもしろかったのは生徒たちの知識もばらつきがあり、お互いに感心しあったり、西尾さんや室崎さんが話される内容にも初めて知ったことがあったりと、ユニバーサル社会のPR用すごろくを製作している自分たちが一番勉強になったかもしれないということです。なにはともあれ、全体像が決まった後は、美術部の女子はデザインやイラスト描き、男子は足りない項目の資料探しと自然に役割分担がなされ、不完全ながらもなんとか下書きを終えることができました。

校正のやりとりの後、仕上げはすべてお任せだったのですが、8月にリーフレットは完成し、すごろく面を見せていただいたところ、立派な仕上がりにとてもうれしくなりました。アイデアだけでなく、生徒の描いたイラストまで原図に忠実に再現されており、また、「このすごろくは神戸市立王塚台中学校のみなさんと兵庫県立総合リハビリテーションセンターが共同で製作しました。」との文字も入れていただきました。製作に携わった生徒たちは自分たちの活動が立派な形になって表れたことを非常に喜んでおりました。後日、リーフレットは2年生全員に配布させ

ていただきましたが、その際に製作のいきさつを話したところ、やはり興味深く聞いておりました。時間の関係で実際にすごろくで遊んでみる時間がとれず、内容の説明だけに終わってしまったのは残念だったのですが、それでもいくつかのコマ、例えば、白い押しボタン付きの信号機やシャンプーのギザギザなどを取り上げて紹介すると、「結構、見かけるのに今まで知らなかった。なるほどなあ。」という反応を感じました。

今回、すごろく製作に携わった生徒たちはそれぞれの家庭でユニバーサル社会について話が弾んだと言っておりました。やはり、子どもたちは新たな発見をしたときにはだれかに話したいという思いになるようです。リーフレットはイベントなどで小・中学生に配られると聞いておりますので、このすごろくが多くの場所で子どもたちの新たな発見を生み、学校や家庭、地域などでユニバーサル社会についての関心が高まるようになればうれしく思います。



すごろく完成!!

第6回公開講座「車いすを科学する」

「ユニバーサルひょうごフォーラム2006」の一環として、平成18年8月6日、当研究所において公開講座「車いすを科学する」を開催しました。

小さなお子さんと一緒に親子で参加の方や小中学生、車いす使用者の方などに挑戦してもらいました。



公開講座の全体風景

★自由体験ゾーン

自由体験ゾーンでは、急な坂道とゆるい坂道、ブロックや排水溝のすきま、斜めに傾いた道や新しい縁石などいろいろな路面を走ったり、さまざまな高さの段差やカーペットなど抵抗の大きい路面の体験もありました。

新しい縁石ブロックは視覚障害者が容易に歩道と車道の境界を認識でき、車いす使用者の方の負担も少ないもので、これは当研究所で研究開発し、交差点改良工事等の標準仕様に採択され、県道に順次敷設されています。

自転車で段差や凸凹道を走るとガタガタと体に振動が響きますが、このような振動は車いすに乗っている人の姿勢を崩したり、腰痛などの二次的

な障害をもたらす危険性があります。このような振動を軽減するために、衝撃を緩衝する機構を備えた車いすも乗り比べてもらいました。

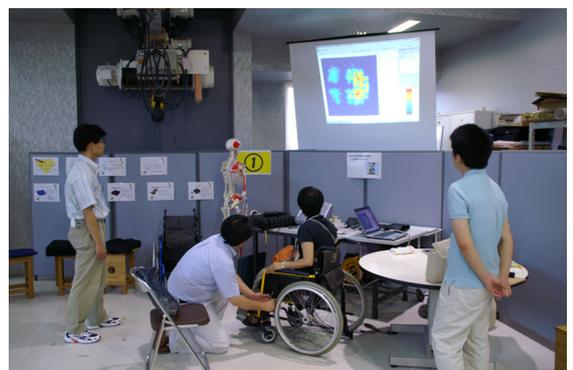


体験ゾーンでいろいろな路面を走る

★車いすを科学するゾーン

ここではいろいろな測定装置を使って、実際にデータを測定し、その結果を一緒に考えました。

車いすに座っているときの安定した姿勢とおしりの圧力を優しく受け止めるためにいろいろなクッションが使われています。



クッションにかかる圧力をはかる

おしりにかかる圧力をはかるコーナーでは、圧力センサーを使って計測し、パソコン上にカラーで表示

される圧力の分布を見ながら車いすクッションの違いを比較しました。

ショックをはかるコーナーでは、9mmと18mmの段差を乗り越えるときのショックを加速度計で測りました。参加者はわずかな段差でも大きなショックを受けることに驚いていました。



段差乗り越えのショックをはかる

走る時の力を測るコーナーでは平らな床を走るときの力と、15mmの段差を乗り越えるとき、さらに坂道を上るときの力を比較してみました。



段差と坂道を走るときの力をはかる

平らな場所ではすいすい走れる車いすですが、歩いているときは気にならないわずかな段差や坂道では、平らな路面の何倍もの大変な力がかかることをグラフで、そして体で実感していました。

家の廊下や出入り口の幅によって車いすの走りやすさを体験するコーナーでは、いろいろな大きさや種類の車いすに乗って、廊下の壁や出入り口にぶつからないように走る時間を競いました。



廊下と出入り口のはばと走りやすさ

頭上のカメラで撮影された模擬走行路で苦戦する映像に、家族や他の参加者から笑い声や声援が送られていました。

科学ゾーン体験者は、計測データと修了印をもらい、多淵研究所長から修了証を授与されました。



修了証を受け取る参加者

途中、井戸知事やはばタンの飛び入りもあり、和やかな雰囲気の中で参加者は真剣に車いすを科学していました。

第14回福祉のまちづくりセミナー記念講演

「観光とユニバーサルデザイン～魅力あるまちづくり～」

JTM バリアフリー研究所 所長 草薙 威一郎

☆はじめに

自らの意思で旅をするのは人間だけ
だれもがともに生きるノーマライゼーションの考えを選んだのも人間だけ

Tourism for All だれでも 自由に
どこへでも

旅は感動、旅は生きる喜び、旅は文化、
旅は人権・・・

だれでも旅をしやすい社会は高度な文化社会

旅のしやすさは社会の到達度を図るバロメーター



☆ノーマライゼーションとは

ノーマライゼーションというのは、障害のあるなしにかかわらず、同等に社会参加することがノーマルな社会であり、そのような社会づくりをすることです。ノーマライゼーションには大切なことが3つあると、ノーマライゼーションの父、バンク・ミケルセンは言っています。1つ目は「自分の居場所（家）」、2つ目は勉強や仕事などの「1日のプログラム」、3つ目は趣味やスポーツなど創造的な時

間である「余暇活動」だと言っています。

日本ではこれがずっと後回しになっていますが、国としては金銭面や施策としてなかなか進まないようです。

☆観光のユニバーサルデザインとは

観光のユニバーサルデザインというのは、年齢や性別、言語や能力のいかににかかわらず、同じように旅を楽しめる観光のあり方だと思います。そのために必要なことは、旅行する人と旅行を迎える人がお互い敬うということ、私もひとりの人として接するということが一番大切だと思います。それによって旅行する人は、旅行という非日常の中で自然や文化、多様な楽しみや探検をすることができます。一方、旅行を迎える側としては、世界各国や日本各地からの旅行者との交流、もちろん観光の経済的な効果、観光によって社会基盤を整備していくということもあります。そして観光は平和のパスポートと言われるように平和維持などの効果もあります。それを合わせていくと高度な文化社会を築く基礎にすることができる、ということになると思います。

今後高齢化していく日本の社会づくりの考え方となる、観光ユニバーサルデザインの原則が次の11項目です。①誰でも旅を楽しむための「公平性」、②さまざまな旅行者に対応するための「多様性」、③さまざまな場面でフレキシブルに対応で

きる「柔軟性」、④旅の「連続性の確保」、⑤旅行情報などが理解しやすい「簡潔性」、⑥旅行費用面での「価格合理性」、⑦事故や医療面での「安全の確保」、⑧「空間的な余裕」の確保、⑨旅の楽しみを味わえる「精神的な余裕」、⑩「五感（見る・聞く・触れる・味わう・匂う）」による旅の楽しみ、⑪「時間的な余裕」の確保。

近年は、観光に行くことだけではなく、五感による観光が重要な要素となってきました。この五感による観光を新しく作っていくためには、ユニバーサルデザインによる観光というのは、かなり意味を持つのではないかと考えています。



☆観光のユニバーサルデザインは、だれが何をすることなのか

観光ユニバーサルデザインの関連分野は、①観光インフラ分野、②観光福祉分野、③観光システム分野、④旅の体験分野の4つに分けられます。各分野にいろいろな課題がありますが、その中に「歩行環境やトイレを重視したまちづくり計画の充実」という課題があります。日本の都市の歩道は世界で一番先に進んだ整備をしていると、海外の方からは言われていますが、田舎のほうに行くと移動はほとんど車で、歩道自体がほとんどない

所もあります。また、トイレについても、以前国際ユニバーサルデザイン会議で、世界中でこんなに立派な車いす用トイレはないと言われました。しかし、設置には費用がかかり場所も取るため数が少なく、対策として、簡易的なトイレの作り方も基準に入ってきています。福祉観光都市を目指している岐阜県高山市では、観光地を歩いていると、「右へ80m行くとトイレがある」というような距離による表示があり、すごく大事なことだと思います。

また、「宿泊施設の整備」については、新築のホテル関係は良くなっていますが、旅館では構造的に難しい面も多いようです。バリアフリー化のために新しく立て直したり改造したりしていますが、温泉や旅館の文化、和風建物などとの兼ね合いも考慮して、これからも努力が必要だと思います。

「歴史・文化観光の充実」については、歴史的文化財や自然環境のバリアフリー化には大変難しい問題があります。文化財保護法では「文化を後世の人に伝えるということと、なるべく多くの人に見てもらう」ということが定められていますが、それが矛盾した場合に解決法が見つからないことがあります。私の考えとしては、外側からの景観も大事ですが、その文化財が持っている価値や本物らしさを、その時代やその地域の人が合意を作り、残すものや直すものをその時の価値として考えることに、出口の一つがあると思います。近畿地区でも高野山バリアフリー化にむけた委員会や、世界遺産で

ある姫路城に、バリアフリーの考えを取り入れていく研究が始まっています。

自然環境についても大事な生態系を守る必要がありますが、これからの観光ではだれでも同等に旅を楽しむことにも重点がおかれるようになってきています。自然から得るものはすごく大きいのに、障害を持つ人は自然と接する機会が少ないように思います。配慮を必要とする旅行者が少しでも自然に近づき、自然と接し、自然からの力を得られるような環境の整備が望まれています。

☆観光のユニバーサルデザインで何を目指すのか

旅行を保障するための課題として、旅行の効用や意義を積極的にアピールしていくことが必要となってきます。また、すべての人が旅を楽しむ自由を人権や法律の中に位置づけ、民間企業のなかでも社会的責任や経済的価値をもっと検討すべきだと考えています。また、快適な旅行をするための課題としては、バリアフリー観光地のモデルプランや計画の作成、旅行介助マンパワーの条件整備、バリアフリー旅行情報の整備など個別の旅行相談に対応できる体制を、民間・行政・NPO が協力して作る必要があります。

観光のユニバーサルデザインが目標としているのは、次の5つだと考えています。①人間の尊厳（すべての人の人格を尊重し、ホスピタリティーをもってあたたかく迎える社会）、②安全と安心（安心して旅行できる社会づくりを進め、安全管理に勤める社会）、③自立と単独（バリ

アフリー化を進めるとともに、マンパワーを整備し、個人が自立し希望すれば一人でも旅行できる社会）、④気ままと選択肢（個人の意志や状況によっていろいろ選ぶ手段がある社会）、⑤幸福と文化社会（同等な社会参加を保障することで、すべての人が幸福を追求できる社会）

特に、いろいろな選択肢を作ることがとても大事だと考えています。スウェーデンでは駅を作る際、駅の入口から見えるように階段やエレベーターなどを設置し、利用者が自ら選べるように建設しています。日本でもずいぶんエスカレーターやエレベーターが設置されていますが、初めての場所だとどこにあるのかわからないということがよくあります。最近はずいぶん表示されるようになっていますが、わかりにくい場所も多いため、だれでもわかるようにすることが大切です。



☆おわりに

今まで障害のある人の旅行というと大冒険でしたが、今は行ける所ではなく行きたい所へ、と望む人も多くなってきました。障害の種類や度合いによって違いがありますが、やっと「旅の権利」が現実のものになってきたようです。

研究所だより

日本福祉のまちづくり学会 第9回全国大会の報告

平成18年8月26日～28日に広島県呉市の大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）と呉大学呉駅キャンパスを会場として開催されました。

今回は開催地呉にふさわしい「海・島・斜面地を抱える地域の福祉のまちづくり」がテーマとされ、研究発表・基調講演・パネルディスカッション等が行われました。

開催当日に呉市水道の送水隧道に落盤事故が発生し、市域に断水区域が生じたため、復旧と給水対策のため陣頭指揮をとっていた大会長の小村和年市長が対策室から作業着のまま基調講演に駆けつけるなど、印象深い大会となりました。

パネルディスカッション「海・島・斜面地を抱えた地域の福祉のまちづくり」では、まちのつくり方と使い方について、各パネリストから歴史的遺産を含めたさまざまな先進事例や地形上の限界等が報告・提起されました。

また、住民代表の方（鈴が峰母親クラブ会長）から、バリアチェックだけでなく、買出しの荷物や乳母車などを使うため、行きと帰りではバスのルートを使い分けて傾斜地での移動を工夫していることなど生活感のある報告がありました。ハードウェアの整備だけでなく、交通システムの使い方などソフトウェアの整備も、あわせて考える必要があると再確認しました。

研究討論会「バリアフリー関連法制度の改正と市民生活の継続」では、パネリストに障害者自立支援法の改正に直接携わった厚生労働省障害福祉専門官を招き濃い内容の会になりました。専門官の話から、この改正は財務省からの突き上げによる、年度末補正の体質を改めよとの至上課題からの見直しであり、福祉予算にかかわらず国レベルでの歳出圧縮の動きを反映しているものようです。また、障害者の雇用環境、労働報酬といった収入に関する問題点についても提起されました。

また、障害を持った生活者の立場で出席した近藤氏（CIL 下関代表）が、「呉の高速艇の船着場にはスロープなどの設備があるが、船員さんが障害当事者の要望について介助者に尋ねることがある。」と、船会社の対応について苦言を呈されていました。ハードウェアのバリアフリー化だけでなく、接客サービス等のソフト面、あるいは人の心のバリアフリー化がユニバーサル社会の実現に非常に重要であることを感じました。



大和ミュージアム展望デッキから東を見る

第 21 回リハ工学カンファレンス参加報告

平成 18 年 8 月 24 日～26 日、日本リハビリテーション工学協会の主催により、神戸学院大学において開催されました。

プログラムは、研究発表と市民公開講座・特別企画、福祉機器展、おもちゃ展など多彩な内容でした。

市民公開講座・特別企画で、料理研究家白井氏の講演「食物（たべもの）が教えてくれること」は、料理を通して生活を見つめ直すと、男性も女性も生活の楽しみも豊かさも、ずっと広がること。今までと違った生活のリズムで人生を見直す局面に立った、熟年世代にとって、料理や食について考えることは、スムーズに人生の階段を上っていくのに必要な何かをサポートする契機になってくれると話されました。

「障害者自立支援法の課題」では、神戸市横田氏は完全移行実施に向け、市町が地域の実情にあわせた、障害者の地域における生活を支えるさまざまなサービスの体制づくりを行っていること。料理に例えて、国は制度（皿）と主な事業（メインディッシュ）を策定し、自治体はその実行体制づくり（食材）と支給制度（盛り付け）を担うと報告されました。

渋谷介護サポートセンター服部氏は、自立に向け授産施設や更生施設で訓練や就業に向けた援助を受けること自体に「支援費」の自己負担が

課せられ、経済的に厳しいという声が出されていること。6 段階の軽度に認定されて、施設入所基準から外れてしまうが、実際に在宅でケアできる環境がないなどの問題点を指摘されました。

横浜市総合リハセンター伊藤氏は厚生労働省の「補装具等の見直しに関する検討委員会」の報告をもとに、障害者自立支援法下における補装具支給の仕組みとその考え方について報告されました。

機器展示では多数の企業から福祉機器や福祉車両の展示があり、見て触って乗ってたくさんの機器とふれあう様子が見られました。

人生を楽しむおもちゃ展は、子どもから高齢者まで楽しむことができるように工夫された遊具の中からユニークな製品が展示されていました。

近隣からの子供連れも多く、手になじみやすい木製遊具をさわって、繊細な木製遊具を見て楽しむといった光景が見受けられました。



見てさわって楽しむおもちゃ展

国際フロンティア産業メッセ 2006、兵庫自治学会出展報告

福祉のまちづくり工学研究所では、研究所の活動や研究開発の成果を広く県民の皆様を知っていただくために、展示会等への出展による広報活動を行っています。

● 国際フロンティア産業メッセ 2006

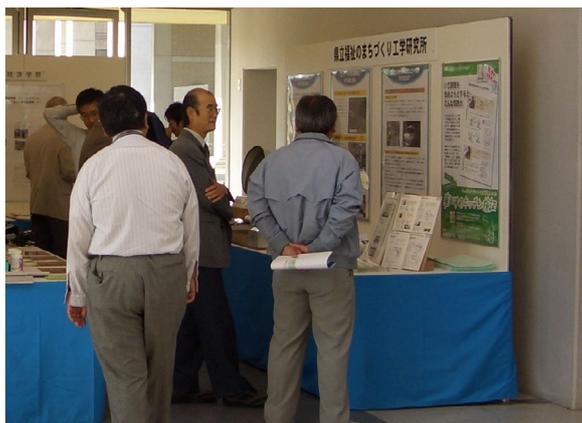
本メッセは、10月4日・5日の2日間、神戸国際展示場にて開催されました。本メッセの主催は、兵庫県、神戸市のほか経済団体など12団体、参加団体はロボット技術やナノテクノロジー、環境・エネルギー分野をはじめとする198団体、2日間で約17,000人の来場者がありました。

当研究所は、リウマチ患者用作業椅子、歩車道境界部縁石ブロック、環境制御装置、上肢リハビリ練習具等の展示を行いました。



● 平成18年度兵庫自治学会研究発表大会

10月21日に兵庫県立大学学園都市キャンパスにおいて開催されました標記大会において研究開発成果の展示を行いました。



今回の展示は、多くの兵庫県職員や県内の識者の方々に研究所の活動や研究開発成果について広報を行うことで、福祉・医療やまちづくりの分野のみならず、各専門領域において兵庫県のユニバーサル社会づくり推進に役立てていただくことを目的としています。

また、研究第一課研究員 西尾幸一郎が『知的障害児のための学校環境づくりに関する研究』について、研究第三課研究員 神吉優美が『自治体による住宅改造助成事業の実態および課題～「人生80年いきいき住宅助成事業に関するアンケート調査」』について報告し、展示及び報告とも、多くの参加者の興味を集めていました。

アシステック 掲 示 板

★ひょうごアシステック研究会 第5回勉強会及び新春情報交換会のお知らせ

- ◇ テーマ 「視覚障害」
- ◇ 日 時 平成19年1月15日(月) 14:00～
- 講 演 『視覚とユニバーサルデザイン』
鹿島建設(株) 建設設計本部 原 利明
- 研究発表 『研究所におけるロービジョン支援機器の開発』
研究第二課研究員
- 見 学 国立神戸視力障害センター
- ◇ 場 所 兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所 2階セミナー室
国立神戸視力障害センター
- ◇ 参加費 会員 無料 / 非会員 1,000円
- ◇ 交流会 勉強会終了後、センター内の食堂で新春情報交換会を予定しています。
会員 1,000円 / 非会員 2,000円

アシステック通信 第51号 2006年(平成18年) 11月

編集・発行 : 社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団
総合リハビリテーションセンター
兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所
〒651-2181 神戸市西区曙町1070
TEL 078-927-2727(代) FAX 078-925-9284
<http://www.assistech.hwc.or.jp>

編 集 後 記

今回は「ユニバーサルひょうごフォーラム2006」の内容を中心にまとめています。研究所では、第6回公開講座として「車いすを科学する」、第14回福祉のまちづくりセミナーとして記念講演を開催しました。また、小・中学生向けにユニバーサル社会をわかりやすく紹介した「みんなでつくろうユニバーサル社会～1日体験すごろく～」を作成し、今回の通信に綴じこみました。